Contact Zone 2014 書評

石原美奈子編著
『せめぎあう宗教と国家――エチオピア　神々の相克と共生』

風響社、2014 年、5,000円＋税、440頁

橋本栄莉

本書は、エチオピア各地に息づく宗教の重層性を、具体的な組織や教義を持つ世界宗教のみならず、在来の精霊崇拝や呪術のような「文字化」されてこなかった広義の「宗教」（本書では狭義の宗教と広義の「宗教」を区別しているが、以下では煩雑さを避けるためいずれも宗教と表記する）と共に明らかにすることを目的とした論集である。エチオピアでは、ユダヤ・キリスト教・イスラームが大航海時代以前に受け入れられ、歴史の中でこれらの宗教は対立と共存を繰り返しながら独自に発展を遂げてきた。また近年のエチオピアでは、宗教が政治化され、新たな対立のきっかけともなっている（10 頁：以下、本書の引用頁は数字のみを記載する）。長年にわたる現地調査を行ってきた 8 名のエチオピア研究者によって執筆された本書では、エチオピアの国家と宗教の関係の歴史的変遷と相互依存関係が明らかにされると共に、そこに暮らす人々の日常的実践の中に埋め込まれた宗教的観念や実践が各論者の関心に沿って描かれている。1990 年代以降のアフリカの宗教を対象とした研究では、いわゆる近代化やグローバリゼーションと宗教との関係が注目を集めているが、本書はあえて国家と宗教の関係に焦点を当てた。各地で宗教をめぐる問題への関心が高まる今日、国家という一地域の歴史と人々の日常的実践の中で宗教が再編されるさまを描き出した本書は、東アフリカの宗教研究のみならず、地域や分野を超えた読者を魅了する著作である。

本書の構成は以下のとおりである。

第一部　国家と宗教
第一章　国家を支える宗教――エチオピア正教会（石原美奈子）
第二章　国家に抗う宗教――イスラーム（石原美奈子）
第二部　遍在する信仰
第三章　邪視・変身・食人
　　――エチオピア・マロにおける呪術的信仰の諸相（藤本武）
第四章　福因と災因――ボラナ・オロモの宗教概念と実践（田川玄）

HASHIMOTO Eri　一橋大学社会学研究科博士後期課程　ehashimo715@yahoo.co.jp

第三部　精霊と権力装置
第五章　精霊憑依と新たな世界構築の技法
——農牧民ホールにおけるアヤナ・カルトの意味世界（宮脇幸生）
第六章　世俗を生きる霊媒師——カファ地方におけるエコ信仰の盛衰（吉田早悠里）
第四部　対立と共存
第七章　対立・干渉・無関心
——バンナにおける福音主義の布教と共存の振幅をめぐって（増田研）
第八章　対立を緩和する社会関係
——ジンマ農村のムスリムとキリスト教徒（松村圭一郎）
第五部　偏在する神性を求めて
第九章　ショワ・オロモの悩みと対処
——エチオピア・ボサト郡周辺の参詣にみられる「共同性」（松波康男）

以下では、本書に収められた「序」、五部九章、「おわりに」をそれぞれ簡潔に要約し、本書の意義および評者のコメントを述べたい。

「序」（担当：石原美奈子）では、エチオピアの宗教に関する背景が概説され、本書のねらいと各章の位置づけ、アプローチ方法が説明される。ここでは、宗教が国家や政治に関わってくる場合、女性など社会的弱者の宗教や日常生活における宗教行動が等閑視される傾向にあったことが指摘される（6）。これに対し、本書の各章では、人々の日常生活においてみられる実践や宗教的観念を、その中で見出される出来事の歴史性や地域的広がりを視野に入れつつ、微視的かつ実証的に記述するという方法が提示される。

第一部「国家と宗教」は二章からなり、キリスト教とイスラームの国家とのかかわりについて、歴史的・人類学的記述が試みられる。

第一章「国家を支える宗教」（担当：石原美奈子）では、4 世紀以降諸外国との交流やエチオピアの政治・社会的風土の中で発展してきたエチオピア正教の形成の軌跡、そして今日のエチオピア人の日常生活を秩序づけているエチオピア正教と関わる空間・時間概念が説明される。前半では、キリスト教の導入、教会制度や組織の発展、キリスト教教会の内部分裂、ムスリムの侵攻や異民族の征服を経て、エチオピア正教がエチオピアにおける支配者層の宗教になるまでの過程が詳述される。ここでは、政教分離が進む現在に至るまで、どのように宗教が政治に利用されてきたのかが示される。後半では、現在も人々の日常生活と深く関わる暦を通した時空間の認識と、食事に関する規定が説明される。以上を通じ、エチオピア正教が一方で信徒の身体や日常生活を律し、他方で聖典にのっとって王国の政治的権威を正当化することで統治を支えたこと、そしてエチオピア正教自体も政治体制に支えられながら発展してきたことが指摘される。

第二章「国家に抗う宗教」（担当：石原美奈子）では、キリスト教優位のもと広まったイスラームが諸民族にどのように受け入れられていったのかが描かれる。本章では、まずその導入の歴史としてエチオピアのイスラーム文化が紹介され、商人や宗教的指導者をエージェントとして各地の信仰や慣習を取り入れながらイスラーム化が進んだ過程が詳述

される。そして周辺ムスリム諸国との関係と共に、エチオピアにおける近年のイスラームの動態が説明される。ここでは、宗教が公共の領域において周縁化された 1974 年以降のデルグ政権時、ムスリムの聖者や在来の霊媒師は弾圧されていたが、現政権下では自由市場経済が盛んとなり、ムスリムが自由と権利を獲得するようになった経緯が説明される。しかし、石原によれば、近年ではムスリム諸国から急進派イスラーム（イスラーム復興主義）が伝来し、それに対して政府が介入しようとしたことで、立場を問わずムスリムの政府に対する不満は募っているという。このような近年の動向を踏まえたうえで、エチオピア史上ムスリムはキリスト教徒に認められている権利を享受できないことが多い一方、国家に抗する中でその統制を免れて交易や王国の建設などの自由を享受していたことの重要性が指摘される。

第二部「遍在する信仰」は二章からなり、エチオピア南部の 2 つの民族（マロ・ボラナ）における在来信仰のあり方を取り上げている。

第三章「邪視・変身・食人」（担当：藤本武）では、定着農耕民マロの在来信仰・呪術的信仰を事例として、エチオピアにおける呪術的信仰の特異性が議論される。まず、1990 年代以降のマロ社会において、在来の信仰や慣習が有害なものとして取り締まられるようになった過程が説明される。藤本によれば、人々は在来信仰の存在は否定しているが、実際には現在も精霊や呪術・邪術は人々の言動に影響を与えているという。続いてキリスト教に忌み嫌われるものとして、マラシャやヒギシャ、エード、コーロと呼ばれるマロの呪術・邪術が詳述され、特にコーロは邪視や食人観念を含み、エチオピアに広くみられるブダの概念――ブダに凝視された者は最悪死に至り、死者は神秘的な力で蘇生させられ、奴隷として使役される――と結びつくことが示される。こうした事例から、エチオピア独自ともいえる呪術的信仰の特性が検討され、特にマロのような階層社会においてその特徴は劣位にある集団を周縁化し、その差異を強化しうるものであることが指摘される。

第四章「福因と災因」（担当：田川玄）では、定住的農牧民ボラナにおいて唯一の天／神とされるワーカへの信仰や邪視・邪術を事例として、福因と災因という宗教的概念と実践がボラナのコスモロジーの中でどのように配置されるのかが検討される。具体的には、ワーカの媒介である宗教的役職者カッルの役割、ガダと呼ばれる年齢体系における移行儀礼が詳述され、社会的に周縁に置かれている宗教的概念や実践である呪術・邪術・予言者（占師）をめぐる状況について検討される。田川によると、ボラナが帝国に併合されるとカッルは国の媒介者となりその儀礼的政治的権威は変質していったが、ガダ体系はワーカが作ったアーダー――ボラナの「慣習」や「伝統」――の一部として、現在でも人々の福因と密接に関わっているという。そして災因は、死霊や死霊を媒介するラーガ（占師）、邪視などを介して語られることが報告される。これらの事例から、ボラナはワーカの概念によって不確実で予測不可能な世界を肯定しており、ワーカが作ったとされるアーダーを精緻に創り上げることで、こうした世界の秩序化を行っていることが指摘される。

第三部「精霊と権力装置」は二章からなり、エチオピア南西部の 2 つの民族（ホール・カファ）にみられる、近年の精霊崇拝をめぐる対照的な状況が報告されている。

第五章「精霊憑依と新たな世界構築の技法」（担当：宮脇幸生）では、農牧民ホールの

間で近年はじまったアヤナと呼ばれる精霊憑依カルトを事例として、精霊憑依カルトの伝播と受容、再解釈のプロセスが、特定の歴史的・社会的・文化的文脈の中でどのように行われたのかが考察される。まず、エチオピアにおける精霊憑依の特徴とホールにおける家父長的なイデオロギーについて説明され、その中で女性たちが強い葛藤を持つことが指摘される。続いて、位階制度があり擬似的な親族関係が内部で形成されるというアヤナ・カルトの特徴と組織が紹介され、その組織はホールの年齢組織の原理を流用しているものであることが明らかにされる。これを通じ、アヤナ・カルトが広まった理由は、特定の人々に不満や剥奪観を抱かせるような社会の側の構造的な要因、さらには国家支配と伝統の相克、それによって人々が抱いた剥奪感にあることが分析される。そして、アヤナは人々に否定されながらも、強く欲望される富と権力の力と同一化し、また一部のホールが自分の置かれた状況を再定義するための社会的資源として受容されたことが指摘される。

第六章「世俗を生きる霊媒師」（担当：吉田早悠里）では、カファ社会における在来のエコ信仰の盛衰と政権交代、社会・経済・政治変化との関係が論じられる。まず、精霊エコと交信する能力を持つ霊媒師アラモを介して、神イェーロを崇拝するエコ信仰とその歴史が説明される。ここでは、カファ王国がエチオピア正教の体制下に組み込まれながらも、エコへの信仰の中でその権限を強化させてきたこと、そしてその中でアラモも改宗したり、エチオピア正教の教会建設に出資したりすることで、自身の影響力や威信を高めたことが報告される。しかし、帝国編入後エコ信仰の信者は減少しており、周縁的地位に置かれている特定の集団はプロテスタントに改宗する傾向にあることが報告される。吉田によれば、カファ社会で周縁に置かれている被差別民や女性は、エコ信仰においても周縁的地位に置かれ続けているという。そして近年の民族自決政策のもと、エコ信仰は「有害な信仰」から、尊重される「文化」へと変わりつつあり、新たな展開を迎えようとしていることが指摘される。

第四部「対立と共存」は二章からなり、エチオピア南西部の２つの社会（バンナ、ジンマ県農村）における、世界宗教をめぐる対立や共存の様子が取り上げられる。

第七章「対立・干渉・無関心」（担当：増田研）では、バンナ社会におけるプロテスタントの布教とその際みられた対立や葛藤を事例として、エチオピア南部における福音主義の布教の社会的な意義と地域社会に及ぼした影響、その共存の道筋が考察される。まず、バンナにおける布教の状況と、その信仰がバンナの伝統的な「信仰」とは性質を異にする聖書の記述に全面的に依拠する福音主義的なものであったことが指摘される。増田によれば、改宗者は被差別階層に属する人々が多かったこともあり、改宗は周囲の反感と憎悪を引き起こし、ミッションに対する嫌悪感を醸成したという。一方、改宗者たちは、バンナの生活文化や伝統的「信仰」に対して厳しい批判の目を向けた。そして、神と悪魔とを対比させ、それを善と悪の構図に対置するというミッショナリーの布教のスタイルそのものに「土着文化否定」の要素があったことが指摘される。一方で、バンナでは２つの信仰を受け入れ可能なものにするロジックが存在することも報告され、キリスト教徒と非改宗者の関係が対立、干渉、無関心の間を揺れ動いている様子が描かれる。

第八章「対立を緩和する社会関係」（担当：松村圭一郎）では、ジンマ県農村における

ムスリムとキリスト教徒の関係を事例として、両者間の日常的な社会関係の構築について論じられている。本章では、宗教間の共生と対立という二項対立図式では捉えられない、異教徒間の緊張を緩和するような社会関係を人々が形成していることが明らかにされる。例えば、一つの葬儀講の中に異なる宗教や民族のメンバーが混在して参加したり、それぞれの宗教内部にも、組合や講などの組織が入れ子状に作られたりしており、各宗教を一枚岩的なものとして捉えることはできないことが報告される。さらに、宗教の差異が顕在化する場面や、宗教の違いを超えた隣人同士の親密さがみられる日常的相互行為や社会制度が取り上げられる。これらの事例から、宗教をめぐる暴力や対立について、その中に生きる人々が常にそれとは異なる他の潜在的な社会関係を同時に築いていることを考慮に入れる必要があることが指摘される。

第五部「偏在する神性を求めて」は、第九章「ショワ・オロモの悩みと対処」（担当：松波康男）の一章である。本章ではエチオピア各地にある聖地を訪れる聖地巡礼が取り上げられ、キリスト教徒、ムスリム、その他の信仰を有する信者らが互いの「悩み」を語り合い、互いに他者のために祈りを捧げ合う「共同性」が描かれる。まず、村や廟における聖性の構築と管理の特徴が検討され、例えば霊媒師の宗教と憑依する精霊の宗教が異なったり、聖者が改宗者であったりするなど、異質な者たちを集める包括のメカニズムを備えていることが明らかにされる。そして人々の参詣の経験が詳述され、いずれの参詣地でも参詣者が悩みを吐露し、同じ「悩みもち」である見知らぬ他の参詣者に対して様々な方法で祈っていたことが指摘される。これらを通じて、異なる背景を持つ人々の参詣地への祈りは、その人が他者であることを表すと同時に、傷つきやすい「悩みもち」同士の接触と関係拡張へと向かう契機ともなっていることが分析される。

「おわりに」（担当：石原美奈子）では、20 世紀に入るまで、政治および人々の日常生活と密接な関係を維持し続けたエチオピアにおける宗教の特殊性がまとめられる。そして近年諸外国から導入された排外的・聖典至上主義的宗教は、強制と融和を善としてきたエチオピアの風土にそぐわないことと、この状況に対して、人々の生活レベルの宗教にこだわった本書の価値が改めて示される。

以上の内容を含む本書は、国家と宗教の関係という大きな歴史の流れを押さえつつも、宗教と共に流動してきた人々の社会関係や宗教的実践との相互関係が論者独自の視点から見事に描写・論述された論集であるといえる。これは、本書の姉妹本でもある『社会化される生態資源』［福井編　2005］と『抵抗と紛争の史的アプローチ』［福井編　2007］にも通じる点である。「序」では、前二書に対して本書を特徴づけるのは、「宗教的エージェントの移動や戦い・交易などの集団間接触によってもたらされる」トランス・ローカリティであることが示されている（6）。前二書が「地方」と「国家」の相互関係に着目し、生態資源や、紛争における集団のアイデンティティについて論じていたのに対し、本書は周辺の民族集団や隣国、交易などを通じた国家間の外交関係という、より広範囲かつ多角的な視野を導入している。各章の記述からは、エチオピアの「宗教」の流動性と地域や民族集団を超えたゆるやかな共通性を見出すことができる。例えば、神の媒介者から国家権力の媒介者としての宗教的職能者の立場・役割の変質や、人々の日常的な経験や悩みと共に流

動し再定位される信仰のありよう、そして在来の慣習や社会関係と新しい宗教の間の相互関係が対立や暴力につながったり、あるいは共生や融和へと向かったりするプロセスなどである。植民地期以降、東アフリカ地域では、宗教的職能者を奉じたり、弾圧の対象としたりする運動が各地で生じてきた［Anderson& Johnson　1995］。近年では、ある地域の信仰が植民地期以降の歴史的過程の中で、新しい制度とリアリティを獲得し、繰り返し暴力を伴う運動を引き起こしてきたことも明らかにされている［浜本　2014］。複数の宗教的概念や実践の絡み合いとその歴史性に焦点を当て、上述のような共通性を提示することに成功している本書は、こうした信念をめぐる運動の歴史的展開の地域間の類似性と差異とを紐解く手がかりを提供するものである。

さらに、本書は「宗教」や「宗教対立」という問題の立て方自体を批判的に捉える視点を提供してくれる。特に本書の後半で描かれるのは、キリスト教、イスラーム、在来信仰といった区別が意味を持たないほど、社会でそれぞれの教義や実践が混淆している一方で、時としてその区別は人々の間で激しい対立を生み出すさまである。こうした問題について松村は、調査者などの外部者が「宗教対立」という問いを立てること自体が「現実にある人々の複合的な社会関係を単一の差異に根差した硬直的な構図におしこめてしまう」（383）と指摘する。こうした外部者による差異・対立の読み込みが紛争の長期化を支えてきた例は、評者が調査を行っているスーダン地域においてもみられる［岡崎　2010］。宗教に限らず、人種や民族という単純化された対立図式に基づく紛争の理解は、他の紛争の要因などを隠ぺいするだけでなく、その対立図式のイメージと共に人々の間で新たな緊張・対立関係を人々の間で生み出しうるものである。本書は、調査者自身が目の当たりにした宗教のリアリティと共に、こうした問いの設定自体に対し批判的な視点を投げかけるものであるといえよう。

一方で、トランス・ローカリティに着目するという本書の特徴に関して、民族集団の移動や地域間の交流の歴史、それに伴う神霊観念や実践の受容と流動に関する記述が少ないように感じられた。例えば、第四章・五章で取り上げられた天／神と訳されたワーカ（203-205）、神（*waaq*）（265）や、アーダー（204）、アーダ（248）などの概念や慣習の広がりについて、この地域に詳しくない読者にとっては、同じ概念として捉えてよいのか、また地域によって別の性質を持つものなのかよくわからない。さらに、この観点からすると、本書の随所で触れられる在来・伝統信仰という見方も揺らいでくる。本書では世界宗教と在来宗教の対比がみられるが、たとえ現地の人々が「伝統」と呼んでいるとしても、それを研究者が「在来」とみなすことがどこまで妥当であるのかは検討する余地がある。必ずしも全ての章があてはまるわけではないが、「在来」・「伝統」の地域間の差異と共通性、あるいはその重層性と流動性について検討することで、本書の特色であるトランス・ローカリティについて、より深い理解が得られるのではないかと考えられる。

とはいえ、このような疑問点は、本書で提示された豊富な歴史的・民族誌的資料の中で浮上してきたものである。論者らの関心に沿った事象の詳細な記述こそが、読者に他地域との比較可能性についての想像力を喚起させるような、迫力と面白さを備えていたことは言うまでもない。歴史の中で醸成されてきた宗教や神霊の在り方、そしてそれらをめぐる

対立や暴力に関する想像力が地域を超えて展開している今日、本書はエチオピアの地域研究にとどまらない可能性を有するものであるに違いない。

＜参照文献＞

岡崎彰　2010 「持続可能な戦争――スーダンの内戦を通して考える」足羽與志子・濱谷正晴・吉田裕編『平和と和解の思想をたずねて』大月書店、pp.300-314。

浜本満　2014 『信念の呪縛』九州大学出版会。

福井勝義編　2005 『社会化される生態資源――エチオピア　絶え間なき再生』京都大学学術出版会。

――――編　2007 『抵抗と紛争の史的アプローチ――エチオピア　国民国家の形成過程における集団の生存戦略』中西印刷。

Anderson, David & Douglas Johnson eds. 1995 *Revealing Prophets: Prophecy in Eastern African History.* London: James Currey.